

〔論 文〕

イギリス児童ファンタジー文学の黄金時代

——その作家・作品と時代背景——

藤 野 寛 之

本稿は「黄金時代」と呼ばれ、いまなお人気
が衰えない、19世紀半ばから第二次世界大戦後
までのイギリスの児童向けファンタジー作品を
たどって、それらがなぜこの時期にイギリスで
出現したのかを考究する試みである。本論考
は、「Ⅰ代表的作家の略歴と作品」、「Ⅱイギ
リスの児童ファンタジー作品を生んだ時代的・社
会的背景」、「Ⅲイギリスの児童ファンタジー作
家の特質」からなる。

Ⅰ 代表的作家の略歴と作品

イギリスの児童の読み物は、19世紀半ばまで
は宗教的な色彩の強いものであり、保護者たち
も教区牧師、あるいは、寄宿学校の教員の教え
るがままであり、死すらも「神に召される幸
せ」であると見なす説教を子どもたちも保護者
たちも受け入れていた。子どもが自由に物語を
読めるようになったのは、市民全体の識字率が
高まった19世紀半ばからである。この時期は
「ヴィクトリア朝」と呼ばれる時期であって、
初等教育から高等教育までが一斉に変貌を遂げ
た時期であった。読み書きの水準が高くなった
のに伴い、子ども向けの読み物の内容も変化し
ていった。ファンタジーと呼ばれる「現実から
隔離された空想の別世界」が子どもたちに対し
て開かれたのはこの時期であった。不思議な魔
法の世界と動物たちの楽しい世界が作品に定着
し、イギリスの児童の読み物はそれまでにない
盛況をもたらしていたが、その背後にはむしろ
「戦争」や「恐慌」に巻きこまれた大人たちの

暗い社会背景があったことも併せて考察してお
かねばならない。

以下に生年順に取りあげる作家たちは、主と
して19世紀半ばから第二次世界大戦後までに新
たな児童文学のジャンルを創りあげた人たちで
あるが、それがいかなる個人的・社会的な状況
のもとにイギリスで生まれたのかは、特に考察
しておく必要がある。

芸術史・芸術批評家として知られたラスキン
(John Ruskin, 1819-1900) は、スコットラン
ド系のシェリー酒輸入業者の息子としてロンド
ンで生まれ、家庭教師から教育を受け、オックス
フォードのクライスト・チャーチ・カレッジ
で学び、現代美術評論集『ヴェネツィアの石：
建築・装飾とゴシック精神』で名をなした。
1869年にはオックスフォード大学の美術学教授
となっている。当時のイギリスの芸術家たちの
パトロン的存在であり、児童書挿絵画家のケイ
ト・グリーンナウェイ (Kate Greenaway) をも
支援していた。児童向けの作品は『黄金の川の
王さま (*The King of the Golden River*)』(1851)
であったが、この作品は初期の本格的ファンタ
ジーの位置を占め、後の作家たちに大きな影響
をもたらしていた。コナン・ドイルの叔父にあ
たるリチャード・ドイル (Richard Doyle) の
挿絵もこの作品の成功に寄与していた¹⁾。

ファンタジーの名作『水の子 (*The Water-
Babies*)』で児童文学の新しい方向を示唆した
キングズリー (Charles Kingsley, 1819-1875)
は、イギリス国教会の牧師の長男としてデボン

州の牧師館で生まれた。1838年にケンブリッジ大学のマグダレン・カレッジに入学したが、内向的で孤独な彼は、独善的と見なす教会の教義についてゆけず、労働者の生活に目を向けており、1850年代のダーウィンの進化論にも反対していた。キリスト教社会主義の立場を守ろうとしたが、結婚して職に就かねばならず、聖職者の道を選んだものの、歴史小説の執筆に力を注いだ。海洋冒険物語『おーい、船は西行きだ！(Westward Ho !)』(1855) およびギリシア神話の再話『英雄たち (The Heroes)』(1856)を出版して名を知られたが、ファンタジー作家としてのキングズリーは、1863年に刊行した『水の子』で児童文学史にその功績を残した。煙突掃除夫の少年トムは、お屋敷の煙突からお嬢さんの部屋に落ち、追いかけて川に転落、水のなかで魚たちと知りあって「水の子」となる。水中での少年の冒険は子どもたちを魅了していた。リチャード・ドイルの挿絵も作品の雰囲気を高めるのに成功していた²⁾。

マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) はスコットランドのアバディーンシャー州ハントリーでリネン工場主の次男に生まれたが、8歳で母を失い、ミドルセックス州のハイバリー神学カレッジに入学した。そこでの教義が不満で、しばらくは巡回牧師の仕事が続けた。不安定な立場を終わらせるため、サセックス州のトリニティ教会の牧師となり、1851年にルイーザ・パウエルと結婚し、11人の子どもを授かった。父は子どもに「おはなし」をしてやるのを好んでいたが、子どもたちのうち7人は幼くして亡くなっていた。彼が詩集と小説を書きはじめたのは1860年代で、そのほとんどは自伝的な作品であった。1867年には最初の児童ファンタジー『妖精とのおつきあい (Dealings with the Fairies)』を刊行したが、この作品集にはすでに、自分の子どもたちに語っていた「おはなし」、すなわち、お姫さまの体重を増やすために自己犠牲を強いられる王子さまの話(「かるいお姫さま」)や誕生から成長への子どもの精神過程をとりあげた「黄金の鍵」が入っ

ていた。こうした子どもの内的な成長の描写に取り組んだ作家として、マクドナルドはチェスタートン (Gilbert Keith Chesterton) 等に評価され、児童ファンタジー作家 C・S・ルイスの先駆者として認められている。作品のうちでもっとも知られた『北風のうしろの国 (At the Back of the North Wind)』(1871)では、作者の宗教観が見事に示されていた。1872年には講演旅行でアメリカに渡り、多数の文学者たちの歓迎を受けた。『お姫さまとゴブリンの物語 (The Princess and the Goblin)』は1872年に、『カーディとお姫さまの物語 (The Princess and Curdie)』は1882年に刊行された。1902年に妻を亡くしたジョージ・マクドナルドは病床につき、回復できないままに亡くなった³⁾。

『不思議の国のアリス (Alice's Adventures in Wonderland)』および『鏡の国のアリス (Through the Looking-Glass, and What Alice Found There)』という中編小説二作で児童文学の古典作家として知られるルイス・キャロル (Lewis Carroll : Charles Lutwidge Dodgson, 1832-1878, 本名はチャールズ・ドジソン) は、父が教区牧師を務めるチェシャー州ダーレスバリーの牧師館で生まれた。11歳でノース・ヨークシャーに移住すると、詩作に打ちこみ、文集『牧師館雑誌』を一人で作って楽しんでいた。パブリック・スクールのラグビー校に入学したが、ここの校風は彼に合わなかった。その後、オックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジに学び、1854年には同カレッジの数学のチューターとなっていた。学寮長ヘンリー・リデルの娘アリスを知ると、キャロルは彼女を主人公にしたファンタジー『不思議の国のアリス』(1865)を刊行して、これが予想に反してベストセラーとなった(1898年までに18万部刊行)。続編の『鏡の国のアリス』(1871)も同様にベストセラーとなっていた。『不思議の国のアリス』は、ウサギの穴から落ちて地下の世界に入りこみ、様々な変身をとげるが、作品は期せずしてヴィクトリア朝の不条理を暴いて、子どもたちの夢の世界を描いたことで、児

Mar. 2014

イギリス児童ファンタジー文学の黄金時代

童文学の初期の金字塔と見なされている。『鏡の国のアリス』は、鏡の裏側の世界に飛びこんだアリスが、ハンプティ・ダンプティやトゥイドルダムとトゥイドルディー等の楽しい登場人物とともに様々なエピソードに巻き込まれ、ついにはこの国の女王となる。二作の挿絵はともにジョン・テニエル (John Tenniel) が担当して、効果をあげていた⁴⁾。

ネズビット (Edith Nesbit, 1858-1924) は、ロンドンのケンジントン地区で、農業学校の経営者の末娘に生まれたが、1862年に父が突然に死去すると、一家は結核を患う姉のためにブライトン、次いで、フランスに転地した。イーデイスは寄宿学校も義理の母も嫌っていた。ロンドンに戻ったイーデイスは、銀行員でフェビアン協会 (Fabian Society) の会員であるヒューバート・ブランドに出会い、1879年に家を捨ててブランドと駆け落ちした。ブランドは同協会の事務職員との間にも娘をもうけていたが、イーデイスはそれを知らなかった。フェビアン協会の会員となった彼女は、フェビアン・ブランドの名前で小説を書きはじめ、生まれた息子の名前もフェビアンとしていた。1899年に一家がエルサムの18世紀の邸宅に住むようになると、イーデイス・ネズビットはファンタジーの短編を『ストランド・マガジン (The Strand Magazine)』誌に連載しはじめた。『砂の妖精 (Five Children and It)』は砂の採集場で子どもたちが「砂の妖精」に出会う話であった。同誌に掲載した彼女の小説はきわめて好評であり、成人小説の作家たちにも歓迎されていた。児童向けのファンタジー初期の世代の女性として、ネズビットは独自の道を開拓したとともに、その後に多数の崇拜者を生んでいた⁵⁾。

グレアム (Kenneth Grahame, 1859-1932) はエディンバラで弁護士の息子に生まれたが、5歳のとき弟を産んだ母が亡くなり、自身も気管支炎でその後の一生を苦しむことになる。妻を失った失意の父親は、フランスで暮らして飲酒にふけり、息子たちをイギリスの祖母の手に預けていた。ここでケネスは恵まれない少年時

代を送った。オックスフォードのセント・エドマンド校に入学した彼は、ラグビーの主将として活躍したが、1874年末には最愛の弟ウィリーを事故で失っていた。叔父は、経済的な理由からかあるいは主義としてかは不明だが、甥が大学に進学するのを拒否した。1870年代にはシェイクスピア劇団に加わって地方回りの巡業に出たり、女王陛下の義勇兵となったりして暮らしたが、1879年にイングランド銀行の事務職員という本人にとっては不本意な職を得た。ここで彼は余暇の時間をすべて文筆に割りあてた。随想を書いていたケネスは、出版界に知己を得て、1895年には自伝的な小説『黄金時代 (The Golden Age)』および1898年には『夢見る日々 (Dream Days)』を刊行し、二作はともによく売れて、彼は文壇に名を知られた。国会議員の娘エルスベス・トムソンと知り合い、1899年に結婚するが、相手は気位の高い人物であり、銀行員の結婚相手を軽蔑していた。1900年に生まれた息子のアラステアは、先天性白内障で片目を失っていたが、父はこの息子を可愛がり、病床のベッドわきで自作の物語を語り聞かせていた。これが名作『たのしい川べ (The Wild in the Willows)』のもととなった。川べの動物たちを主人公とする『たのしい川べ』は、町へ出たヒキガエルが、仲間のネズミやモグラとともに冒険を繰り返す話であり、この作品も『クマのプーさん』と同じくアーネスト・シェパード (Ernest Shepard) の挿絵により親しみを倍加していた。執筆の収入で屋敷も手にいれ、生活は落ちついていたが、息子のアラステアは大学生のときに不慮の死をとげていた。失意のケネス・グレアムを最後に喜ばせたのは作家ミルンが『たのしい川べ』を舞台化した『ヒキガエル屋敷のヒキガエル』の大成功であった。長患いの末、1932年に亡くなったグレアムは、遺産をオックスフォード大学のボドレイ図書館に寄付していた。最初に書かれたこの作家の伝記は、妻のエルスベスにより編纂された。その後、この不運な作家の伝記は多数書かれている⁶⁾。

永遠に歳をとらない少年ピーター・パンを描

いて、若者にいまなお圧倒的な人気を誇るジェームズ・バリー (James Matthew Barrie, 1860-1937) は、スコットランドの東部の町キリミューで織物職人の三男に生まれた。1882年にエディンバラ大学を卒業すると、ジャーナリストを志望し、『ノッチングム・ジャーナル』の記者となり、同時にセンチメンタルな作風の小説で次第に名をなしていた。その後『あっぱれクライトン』(1902) その他の戯曲を次々に発表した。空前の人気作となった『ピーター・パンとウェンディ (Peter and Wendy)』のピーターは、『小さな白い鳥』に登場する少年としてすでに知られていた。「ピーター・パン」の銅像はいまなおロンドンのケンジントン公園に建てられている(図1)。しかし、バリーの生涯に陰をおとしていたのは、6歳の時の兄の事故死、35歳の時の姉と母の突然の病死、1894年に結婚した妻との離婚であった。バリーは1919年にセント・アンドリュース大学の学長に選ばれ、1930年から死去の年まではエディンバラ大学の学長を務めており、名誉博士号は1926年にオックスフォード大学から、1930年にはケンブリッジ大学からそれぞれ贈られていた⁷⁾。



図1 ケンジントン公園のピーター・パン像
(筆者撮影)

ポター(Helen Beatrix Potter, 1866-1943) は不動産業者の一人娘として、ロンドンのサウス・ケンジントンで生まれた。父が膨大な遺産を受け継いだため、家庭教師のもとで学んだ。母と同名のため、ミドル・ネームのビアトリクスと呼ばれ、弟とともに庭や森の自然を相手に暮らしていた。弟が寄宿学校に入ると、病弱のために孤独な生活を強いられた。1882年に一家はイングランド北部の湖沼地帯で暮らし、ビアトリクスは化石とキノコの採集にのめりこみ、1897年には彼女の論文がエディンバラのリンネ協会(Linnean Society)で発表されるまでとなっていた。動物好きの彼女が、家庭教師ムーアの息子ノエル・ムーアへの1893年の書信に同封したウサギの絵は『ピーター・ラビットのおはなし (The Tale of Peter Rabbit)』の原画となった。絵は可愛らしいが、物語は主人公の反抗の気持ちが表に現れており、出版社からは出版を断られ続けた。自費出版の小型本が発行されたのは1902年であった。1905年にビアトリクスはワルヌ出版社の編集者ノーマン・ワルヌと婚約したが、相手は白血病のため4週間後に死去した。傷心のポターは、湖沼地帯に牧場を構えた。ここで彼女は児童向けの絵本の執筆に熱中するとともに、牧場を次々に拡張していった。リスのナトキン、ウサギのベンジャミン、ネズミのジョニーは皆この作者のペットの名であった。絵本の細かな作業のため健康を害していた彼女が、幼いころからのもう一つの夢であった牧場の経営に乗り出したのは、宅地建設のために失われてゆく自然環境を少しでも保存するためでもあった。羊の育成で農業賞を受賞したこともあった。1913年に47歳のビアトリクスは土地の法務官ウィリアム・ヒーリスと結婚した。気管支炎を患った後、彼女は1943年に亡くなったが、土地の遺産はすべて夫に遺贈され、その後にナショナル・トラストに寄付された。絵本作品の原画はロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館、その他が所蔵している。物語と挿絵を自作する初期の作家であったビアトリクス・ポターの作品は、主人公の愛らしい姿の

Mar. 2014

イギリス児童ファンタジー文学の黄金時代

ため、後々まで子どもたちに愛読され続けている⁸⁾。

ファージョン (Eleanor Farjeon, 1881-1965) はユダヤ系小説家とアメリカ人舞台俳優の娘の子どもとしてロンドンで生まれた。家庭は芸術家たちの集会場であり、兄たちはそれぞれ著名な音楽家および作家としてすでに名をなしていた。エレノアが22歳のとき、父親が財産をまったく残さずに亡くなったため、夢見がちな家庭教師のもとで育った娘は、書くことで自立せねばならなかった。『マーティン・ピピンとリンゴ園 (*Martin Pippin in the Apple Orchard*)』が1921年に世に出、この作品が評判となった。その文章の良さのために彼女をひいきにする出版社も増え、兄との共作の舞台劇台本も当たった。しかし、ファージョンの名をもっとも高めたのは児童向けの幻想的な短編集『本の小べや (*The Little Bookroom*)』(1955)であった(そのうちの一冊が『ムギと王さま』、もう一冊が『天国を出てゆく』を収録)。この作品は「カーネギー賞」および「アンデルセン賞」、さらに「レジナ賞」を授けられていた。彼女の作品は、子どもの驚きと期待の感覚を見事に描き出す文章として傑出していた。肉親の多くに死別していたエレノアは、友人をつくるのが得意であったし、独身の一生を貫きながらも、10歳年下の学校教師ジョージ・アールとともに暮らし、その死後は20歳年下の舞台俳優デニス・ブレイクロックと同居していた。1951年に彼女はカトリック教に帰依した。エレノアの仕事を記念するためイギリス図書協会(現CILIP)は、年度ごとの「エレノア・ファージョン賞」を創設し、優れた児童文学に授与している⁹⁾。

『クマのプーさん (*Winnie-the-Pooh*)』で世界的に知られたミルン (Alan Alexander Milne, 1882-1956) は、ロンドン市北部のキルバーンで学院長の三男として生まれた。パブリック・スクールの名門ウェストミンスター・スクールではクリケットに熱中していた。その後、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに進むと、父親はこの息子を学院の後つぎにしたかっ

たが、当人はすでに文筆で名をなす決心をしていた。卒業後に絵入り週刊誌『パンチ (*Punch*)』の寄稿者となり、その名を知られるようになっていた。1913年に結婚したが、平和主義者のミルンは、義勇兵となって第一次世界大戦に参加した。戦時中に彼は戯曲を書きはじめしており、その後の彼はむしろ劇作家として知られた。1920年には一人息子のクリストファーが生まれた。1922年に発表した『赤い館の秘密 (*The Red House Mystery*)』は、当時の探偵小説の流行に意図的に参加した作品であったが、その劇的構成と予想を覆す結末により爆発的な売り上げを示したため、あるアメリカの出版社がその続編を作者に書かせようとしたが、これは断って、彼は次のアイデア、児童向けの創作童話の実現に取り組んだ。まず1926年に執筆したのが、息子クリストファーとロンドン動物園の黒熊をモデルにした作品『クマのプーさん』であった(図2)。原題の「ウィニー・ザ・プー」はカナダのウィニペグから来ていた動物園のクマから思いついていた。物語は平和な「魔法の森」でのクマのプーとクリストファーの様々な冒険と他の動物たちとの交遊が牧歌的な風景の



図2 クリストファー・ロビン・ミルンとクマのぬいぐるみ¹⁰⁾

なかで展開する。作品の成功をさらに確実にしていたのはアーネスト・シェパードの挿絵であり、見事なまでに作品の意図を表現していた。ミルン一家はサセックス州ハートフォードの農場に移り住み、ここで『プー横丁にたった家 (*The House at Pooh Corner*)』が1928年に刊行され、これまた前作同様にベストセラーとなった。1930年代の暗い時代には戯曲を書き継いで暮らし、児童書の作家と呼ばれるのを嫌ったが、クマのプーの人気は衰えなかった。イギリスの文学研究者たちのあるグループは「プー学」という団体をつくっている。ミルンの児童書としては、他に『昔あるとき (*Once on a Time*)』(1917)、および、グレアムの『たのしい川べ』を舞台化した『ヒキガエル屋敷のヒキガエル』(1929)がある。なお、息子のクリストファー・ロビン・ミルンもその後、作家となり、回想録その他を刊行していた¹¹⁾。

ランソム (Arthur Ransome, 1884-1967) はリーズ大学の歴史学教授の息子としてリーズで生まれたが、13歳で父と死別した後に、ジャーナリズムの世界に飛びこんだ。1913年にロシアに赴き、革命を取材して、レーニンとも知り合い、トロツキーの秘書の娘と結婚した。エストニアに居を定めたランソムは、バルト海の周遊に乗り出し、若いころに釣り好きの父とともに湖水地方ウィンドミアで船遊びをした記憶がよみがえった。その後、新聞社からエジプトや中国に派遣されたが、政治の世界からは身を引き、児童書その他の執筆に専念した。最初のファンタジー作品『ツバメ号とアマゾン号 (*Swallows and Amazons*)』は、湖を舞台にした子どもたちの冒険物語であり、想像上の島での活躍が記されていたが、作品は好評で、このシリーズは12巻までが続いた¹²⁾。

アトリー (Alison Uttley, 1884-1976) は農場主の長女で幼名アリス・ジェーン・テイラーとして、ダービーシャー州マトロックに生まれ、地質学に興味を持って、1903年にはマンチェスター大学の奨学生となり、1906年にはそこで女性として二番目に物理学の学位を取得し

ていた。後の1970年に同大学は彼女に名誉博士号を贈っている。教師になろうと、ケンブリッジ大学の教員養成学校に進み、1908年にはロンドンのフルハム女子中学の物理学教師の職に就いた。1911年に技師のジェームズ・アトリーと結婚し、息子のジョンが生まれたが、第一次世界大戦に出征した夫は負傷で半身不随状態となり、1930年に資産を残さずに死去した。すでにアリソン・アトリーの名前で1929年に児童書『リスとウサギとリトル・グレイ・ラビット (*The Squirrel, The Hare and the Little Grey Rabbit*)』を刊行していたが、アリソンの文才を認めていたのはマンチェスター大学の哲学教授サミュエル・アレクサンダーであった。自由な動物たちの活動にあふれる、まだ産業の進出に煩わされていない未開のイギリスの田舎の描写は子どもの読者を魅了した。精力的なアリソンは「グレイ・ラビット」シリーズを含め多数の児童書を刊行していた。そのうちで代表作と見なされた作品にタイム・スリップものの先駆けとなる『時の旅人 (*A Traveller in Time*)』があった。その後、バッキンガムシャー州に住まいを移すと、ここが彼女の第二の故郷となった。科学者の出身らしく、アリソン・アトリーは日常生活も規則的であった。唯一の趣味は絵画の収集で、多くはないが選定の目のきいたコレクションをその死後に残していた¹³⁾。

ロフティング (Hugh Lofting, 1886-1947) はパークシャー州メイドンヘッドでアイルランド人公務員の4男として生まれた。幼いころから動物と旅行を好み、アメリカとカナダの学校で学んだ後に、西アフリカ、次いでキューバで鉄道技師として働き、1912年にはアメリカで結婚、1916年にイングランドに戻って、アイルランド義勇兵として第一次世界大戦に参戦したが、翌年には負傷した。その後、アメリカのコネティカット州に住んだロフティングは、創作童話の執筆に専念した。最初の本『ドリトル先生アフリカゆき (*The Story of Doctor Dolittle*)』は1920年に刊行された。息子は父との文通のなかで父を半ば親しみをこめて「ドゥーリトル

Mar. 2014

イギリス児童ファンタジー文学の黄金時代

(怠け者) 先生」と呼んでいた。作品のドリトル先生は、動物の面倒見を優先する風変わりな医師で、賢いオウムのポリネシアの助けであらゆる動物語を理解している。シリーズの第2作『ドリトル先生航海記 (*The Voyages of Doctor Dolittle*)』(1922) はニューベリー賞を授けられた。なかには、白人になりたがるアフリカの酋長の描写が批判されたこともあったが、「ドリトル先生」シリーズは好評裏に出版された。創作童話の執筆はその後も病床で行われていたが、1947年にカリフォルニア州トパンガで亡くなった。ドリトル先生の姿は、人類の将来を危惧し、反戦を主義とする作家ロフティングそのものであった¹⁴⁾。

壮大な古代ファンタジー『指輪物語 (*The Lord of the Rings*)』の作者トルキン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973) は、アフリカ銀行の支店長の長男として南アフリカのブルームフォンティンで生まれたが、3歳で母とともにイギリスに帰った。父は任地で亡くなり、子どもたちを育てていた母親も1904年に死去して、息子はカトリックの司祭に預けられた。オックスフォード大学で古代英語の研究に専念し、1916年に結婚した。同年には第一次世界大戦に参戦し、塹壕戦で大学時代の二人の親友を失った。悲惨なこの戦争の影は彼の生涯に最後まで影響をもたらしていた。トルキンは、戦後の1920年にリーズ大学に奉職し、1925年にはアングロ・サクソン言語学の教授としてオックスフォード大学エクセター・カレッジに招聘された。彼はここで研究とともに古代伝説に基づくファンタジー小説の執筆にとりかかり、1937年には小人族のホビットが魔法使いのガンダルフとともに旅をする物語『ホビットの冒険 (*The Hobbit, or There and Back Again*)』を刊行した。この作品はその後に続く一大長編『指輪物語』の序曲であった。オックスフォードでは酒場「イーグル・アンド・チャイルド」に集まる文学仲間「インクリングズ」で作家のC・S・ルイス等と議論を戦わせていた。『指輪物語』は、『旅の仲間 (*The Fellowship of the*

Ring)』(1954)、『二つの塔 (*The Two Towers*)』(1954)、『王の帰還 (*The Return of the King*)』(1956) という三部からなる大作で、ホビット族のフロド・バギンスが「中つ国」を支配する冥王サウロンと対決して、支配の鍵となる指輪を取り戻すという大作物語で、長編であるとともに、近代文学の傑作に位置づけられる作品として知られている。故郷に帰ったバギンスはそこがすでに破壊されていたのを見いだす。トルキンはさらに没後に息子クリストファーにより編纂・刊行された『シルマリルの物語 (*The Silmarillion*)』を書き残していた¹⁵⁾。

連作ファンタジー小説『ナルニア国ものがたり (*The Chronicles of Narnia*)』を書いたクライヴ・ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) は、オックスフォード大学マグダレン・カレッジの中世英文学の権威者で、在任中は文学サークル「インクリングズ」の一人として作家=古代語研究のトルキンと親しかった。北アイルランドのベルファストで生まれたルイスは、9歳で母を失い、北欧神話の世界に没頭して育った。そして、彼も1918年には第一次世界大戦で負傷していた。オックスフォードでの研究のかたわら、ルイスが神話を題材とした文章を書きはじめてのは1930年代の後期からであったが、1950年から1956年にかけて書いた『ナルニア国ものがたり』7部作がその代表作品となった。第一巻『ライオンと魔女 (*The Lion, the Witch and the Wardrobe*)』からはじまり、『カスピアン王子のつのぶえ (*Prince Caspian*)』、『朝びらき丸、東の海へ (*The Voyage of the Dawn Treader*)』、『銀のいす (*The Silver Chair*)』、『馬と少年 (*The Horse and His Boy*)』、『魔術師のおい (*The Magician's Nephew*)』、『さいごの戦い (*The Last Battle*)』と続くこの大作は、ふとしたきっかけで架空の国のとある時代に入りこむ子どもたちの見聞を記録しており、ライオンの王アスランを助けて、魔女の支配するナルニア国で奮闘するさまが記されている。作品はその面白さだけでなく、ポーリン・ベインズ (Pauline Baynes) の挿絵によりさらに評価を高めてい

た。この挿絵画家はルイスおよびトールキンのお気に入りであった。58歳のルイスは、ガンで余命のないアメリカ人ジョイ・ディヴィドマンと1956年に結婚した。妻のジョイは4年あまり生きのびて彼を献身的に支えた¹⁶⁾。

魔法の世界からやって来て、住みこんだ一家に不思議な出来事をもたらす家政婦メアリー・ポピンズが主人公の「メアリー・ポピンズ」シリーズで創作童話の作者として一躍有名となったパメラ・トラヴァース (Pamela Lyndon Travers, 1899-1996, 本名ヘレン・リンドン・ゴス) は、1899年にオーストラリアのクイーンズランドでアイルランド系移民の牧場主の娘に生まれた。父親の死後、母とともにシドニーに移住、一時期は移動劇団の女優＝歌手となり、1924年にロンドンに移った。病を経て、闘病生活の間に彼女が詩作や創作を書きはじめたのは1930年代からで、最初の作品『風にのってきたメアリー・ポピンズ (Mary Poppins)』(1934) は、『ニューヨーク・タイムズ』紙の書評では不評であったが¹⁷⁾、ニューヨーク公共図書館の児童部門主任の評論家アン・キャロル・ムーア (Anne Carroll Moore) により評価され、児童文学の傑作として世に出た。出版社の要請で作品はシリーズとして書き継がれ、『帰ってきたメアリー・ポピンズ (Mary Poppins Comes Back)』(1935), 『とびらをあけるメアリー・ポピンズ (Mary Poppins Opens the Door)』(1944), 『公園のメアリー・ポピンズ (Mary Poppins in the Park)』(1952), 『メアリー・ポピンズ, A から Z (Mary Poppins From A-Z)』(1963), 『キッチンメアリー・ポピンズ (Mary Poppins in the Kitchen)』(1975), 『サクラ並木のメアリー・ポピンズ (Mary Poppins in Cherry Tree Lane)』(1982), 『メアリー・ポピンズととなりの家 (Mary Poppins and the House Next Door)』(1989) が次々に刊行された。パメラは第二次世界大戦中には合衆国に住み、ナバホ、プエブロのアメリカ・インディアン居留地で暮らした。戦後の1945年にはイングランドに戻り、創作に専念していたが、1964年にディズニーが制

作した映画「メアリー・ポピンズ」は興行的には成功したものの、期待した「神秘面」が描ききれず、原作者は不満であった。1965年から1977年にはアメリカに戻って、ラドクリフ・カレッジ、スミス・カレッジ、および、カリフォルニアのスクリップス・カレッジで「神秘思想」の授業を担当、1976年以降は、禅、イスラム神秘思想の研究に没頭し、1996年ロンドンのチェルシーの自宅で亡くなった。「メアリー・ポピンズ」の賛美者たちが訪れてくるのを嫌ったトラヴァースは遺灰が埋められた場所を誰にも知らせなかった。『メアリー・ポピンズ』シリーズの魅力は、魔法の国からやってきた主人公が引き起す奇想天外なその行動の面白さにあったのであろうが、その空想力のたくましさは、アイルランドの祖先からの遺産かもしれない。「神秘思想家」ヘレン・ゴスについては、児童作家トラヴァースの陰で知られていないが著作もかなりあった¹⁸⁾。

外科医師の一人娘としてロンドンで生まれたメアリー・ノートン (Mary Norton, 1903-1992) は、家族とともにベドフォードシャー州のジョージ王朝時代の古い屋敷に住んだ。幼いころから病弱で、孤独な生活を余儀なくされていた。セント・メアリー修道院で学んだ後、一時期「シェイクスピア劇団」に所属して舞台に立ったが、1927年に海運業者の男性と結婚し、ポルトガル、次いで、ニューヨークで4人の子どもたちを育てながら児童書の創作に専念した。最初の本『魔法のベッド南の島へ (The Magic Bed Knob; or, How to Become a Witch in Ten Easy Lessons)』は1943年にアメリカで出版された。離婚してイングランドに戻ったノートンが1952年に書いた『床下の小人たち (The Borrowers)』は大評判となり、カーネギー賞を授けられた。続編は次々と出版された。『野に出た小人たち (The Borrowers Afield)』(1955), 『川をくだる小人たち (The Borrowers Afloat)』(1959), 『空をとぶ小人たち (The Borrowers Aloft)』(1961), 『小人たちの新しい家 (The Borrowers Avenged)』(1982)。こ

のシリーズは、子どものころから極度の近眼で、野原の草や川べの虫の穴を覗くのが好きだったメアリーの趣味と空想が生かされた作品であり、屋敷の床下に住み、生活のすべてをひたすら地上の人間世界からの「借り暮らし」で生きている、30センチほどの背丈の小人一家が主人公であり、小人の娘のアリエッティは人間の生活に関心を持ち、屋敷の少年と仲良しになるが、長続きせず、小人の一家はそこを出て放浪の生活を送り、ときに見せ物に売られそうにさえなるが、そのようななかで生き抜く物語であった。作品の連作全体が「人間社会」に依存しなくては生きられないものの、人間の物質文明の「危うさ」を関知している小人の世界を、読者は共感をもって受け入れることができる。わが国でもスタジオジブリにより映画化されている。挿絵の画家はダイアナ・スタンレー（Diana Stanley）であった¹⁹⁾。

Ⅱ イギリスの児童ファンタジー作品を生んだ時代的・社会的背景

「黄金時代」の時期のイギリスの名作とその作家を列挙してきたが、様々な作品には、各作家の生涯や思想から生まれるそれぞれの意図があったとともに、その背後にはイギリスという国の風土と歴史と社会とが影響をおよぼしていたはずである。本章は「ファンタジー」作品の多くがなぜイギリスで生まれたのか、その原点を取りあげて、作品そのものの理解をいっそう深めるための試みである。

1. イギリスの風土

四方を海に囲まれ、それほど大きくはない島国イギリスは、歴史の古さを刻んだ国土からなっている。ケルト族の移住、ヴァイキングの襲来以前より、大西洋からの西風にさらされ続けてきたこの土地は、独自の様相を呈しており、ネス湖の威容は言うまでもないものの、岩山と森とに囲まれた風景は、特にアイルランドとスコットランドにあっては神秘的な様相を醸

し出している。この風土のなかで神話と伝説が生みだされ、現在に至るまで継承されているのも不思議ではない。ここには新たな「神秘」を醸成し、「ファンタジー」作品を産出させる土地柄があった。アイルランドの詩人イエイツ（W. B. Yeats）が収集した伝説集には、現代に至るもなお信じられている妖精たちの習慣が集められている。この土地には、古く17・18世紀以前に建てられた城塞や屋敷がなお残されており、好んでそこに住む人たちも多いが、そうした場所は想像力に富む作家たちを刺激し、作品の源泉になりかねない。パブリック・スクール等の古い造りの建物の一部には、『ハリー・ポッター』シリーズの魔法学校のごとき「秘密の部屋」はいくつもあった。

2. 19世紀後期のイギリス

前述した作家たちとその親たちのほとんどは、いわゆる「ヴィクトリア朝（ヴィクトリア女王の治世時期 [1837-1901年]）」の雰囲気の中で育っていた。彼らが当時の世界を先導していたこの王国に対して消しがたい「郷愁」を覚えていたのは当然であり、それはほとんどの作品の背景となっていた。この時期はまた「改革の世紀」と呼ばれており、社会のあらゆる領域で改革が進行していた²⁰⁾。特に教育改革は因習的な風習を打破し国民全体の義務教育を実現していた。一方で、ヴィクトリア朝のイギリスには、まだ工業化による宅地造成で奪われることのなかった緑の森と原野が残されており、羊や牛からリスやモグラ、川のは子どもたちとともにのどかに暮らしていた。古き良きヴィクトリア朝の思い出はそこで生まれ育った作家たちとその親たちの心情のなかに温存されていた。

3. 20世紀前期のイギリス

イギリスが急激な変化をとげたのは20世紀前期の「波瀾」の時代においてであった。前述の作家たちは19世紀後期のヴィクトリア朝の時期からこの時期にかけて自分たちの作品を公表し

ていた。当然、そこには自分たちが成長した、もしくは伝え聞いたヴィクトリア朝の安定した秩序が描かれることになっていた。動物の世界は子どもたちの世界と混在した理想の空間であった。しかし、同時にこの時期は、市民生活を根底からゆるがす変動の最中にあった。1914年からはじまる第一次世界大戦は、ヨーロッパ諸国の先頭にたってドイツと戦ったイギリスに回復しえないほどの痛手をもたらし、大英帝国は列強の地位から脱落していった。この戦争が個人に及ぼした傷痕もまた大きかった。塹壕戦で死に直面していた作家は、ミルン、ロフティング、トールキン、ルイスと多数にのぼっていた。トールキンにいたっては、そこで人類の「破滅」とヨーロッパ文明の「終焉」を予想したほどであった²¹⁾。

同時に、20世紀前期のイギリスでは、社会秩序とともに人々の信仰心が失われ、無神論の主張が横行していた。ここにも「古き良き」時代の秩序を取り戻したい作家たちの願望がその表現に現れていた。闘争のない動物の世界とそれに接していた子どもの世界の空想上の冒険物語は、時代に対するアンチテーゼでもあった。

4. 同時期のイギリスの社会的背景

すでに紹介した古典作品の作家のうち、20世紀に入ると女性作家がその数を伸ばしていることが分かる。イギリスでは19世紀後期より女性に対する高等教育が普及していた²²⁾。たとえ高等教育を受けていなくとも、社会の各方面で才能を発揮する女性の姿が見られた。文筆の職業もその一つであった。女性の教養の高さは、彼女らが責任の一端を担う子どもの読書にも影響をもたらしていた。この傾向を敏感に感知していた児童書の出版界が20世紀前期以降に急成長していた。

ここで、19世紀後期から20世紀初頭にかけてのイギリス市民の識字率をあげてみる²³⁾。

	男性		女性	
	識字率	伸び率	識字率	伸び率
1841	67.3		51.1	
1851	69.3	2.0	54.8	3.7
1861	75.4	6.1	65.3	10.5
1871	80.6	5.2	73.2	7.9
1881	86.5	5.9	82.3	9.1
1891	93.6	7.1	92.7	10.4
1900	97.2	3.6	96.8	4.1

この当時の識字率は何を基準にしているか、その根拠は不明であった。一般的には「結婚登録」で自分の名前が書けるかどうかといった程度の判断によっていた。また、子どもの識字率については不明であった。とはいえ、この数値からは、義務教育が普及し定着した1870年代から1900年代にかけて識字率が急速に上昇したこと、ヨーロッパ諸国と比べても高めの数字を記録していたこと、そして、特に女性の識字率がきわめて高かったことが分かる。子どもたちの教育に責任を持つ保護者、特に女性の識字率はその子どもたちに影響を及ぼす。児童文学はこの時期に盛況を呈しており、例えば『不思議の国のアリス』(33年間で18万部)および『鏡の国のアリス』(22年間で8万部)はすでに19世紀後期からベストセラー作品となっていた²⁴⁾。

Ⅲ イギリスの児童ファンタジー作家の特質

19世紀後期から20世紀前期にかけて児童ファンタジー作品の「黄金時代」を生んだ作家たちの意図はどのあたりにあったのであろうか。前述の作家たちの略歴を踏まえると、彼らのほとんどがそれぞれ個人的不幸に直面し、時代の変遷に翻弄されていたことが分かる。個人的には、若くして親や兄弟姉妹を失ったり、結婚相手に裏切られた者も多かったし、戦争で自ら傷ついた者もかなりいたが、こうした作家たちは、同じ時期に、児童の夢を育む、明るい作品を刊行し続けていた。もちろん、児童に向けて暗い作品を書く者はいないが、彼らが語る動物たちや架空の国、妖精の世界こそ「古き良き」

時代の象徴であった。

エドワード・フォースター (Edward Forster) が1910年に発表した図書『ハワーズ・エンド (Howards End)』の標題紙のなかに「オンリー・コネクト」という言葉が出てくる。フォースターが「コネクト (結びつき)」を期待したのは、変わりゆく時代の変化に対してであり、具体的にはヴィクトリア朝とエドワード朝の乖離であり、イギリスとドイツを背反させてゆく時代の趨勢であった。事実、ドイツはヴィクトリア女王にとっては父の出身地であり、女王の長女はプロイセンのドイツ皇帝の妻であった。フォースターは暗にこの「結びつき」を生まれてくる次の世代に期待していたが、期待は世界大戦により裏切られていた。

イギリスの児童文学の作家たちは、こうした時代の流れを感じとっており、自分たちの作品を通して、少なくとも児童にはこうした暗い時代と閉塞感が漂う未来とを知らせまいとしていた。彼らのファンタジー作品の世界がいっそう明るく見えるのは、動物たちや小人たちがのびのびと生きているからであった。同時に彼らの生きざまは、そのまま、自然の破壊をいとわぬ産業社会の人間の生き方への批判でもあった。イギリスが前世紀の繁栄の社会でなくなっていることは、ウィリアム・モリス (William Morris) の指摘があったためばかりでなく、トルキンの『指輪物語』のホビット族の嘆き²⁵⁾からも読み取れよう。

〔付 記〕

本稿は2012年度阪南大学産業経済研究所助成研究 (C)「児童書批評誌『ホーン・ブック』の研究：情報メディアの分析」における研究成果の一部であり、博士論文 (児童学、聖徳大学 [2013年]) 執筆の際に生まれた研究成果である。

注

- 1) Hilton, T., *John Ruskin: The Later Years*, 2000; Hunt, J. D., *The Wider Sea: a Life of John*

- Ruskin*, 1982; Landow, G. P., *Ruskin*, 1985.
- 2) Martin, R. B., *The Dust of Combat: a Life of Charles Kingsley*, 1959; Chitty, S., *The Beast and the Monk: a Life of Charles Kingsley*, 1974; Thorp, M. F., *Charles Kingsley*, 1937; Uffelman, Larry K., *Charles Kingsley*, 1979.
- 3) Raeper, W., *George MacDonald*, 1987; Robb, D. S., *George MacDonald*, 1987, 136p.; Sadler, Glenn Edward, "MacDonald, George" *O.D.N.B.* (*Oxford Dictionary of National Biography*, 以下 *O.D.N.B.* と略す), v.35, 2004, p.230-234.
- 4) ルイス・キャロル研究はきわめて多い。代表的なものは以下のとおり, Bakewell, Michael, *Lewis Carroll: a Biography*, 1996; Collingwood, S. D., *The Life and Letters of Lewis Carroll*, 1898; Cohen, M. N., *Lewis Carroll: a Biography*, 1995; Cohen, M. N., *Lewis Carroll: Interviews and Recollections*, 1989; Cohen, M. N., *Reflections in a Looking Glass*, 1998.
- 5) Nesbit, E., *Long Ago When I Was Young*, 1966; Nesbit, E., *Wings and the Child*, 1913; Briggs, J., *A Woman of Passion: The Life of E. Nesbit, 1858-1924*, 1987; Streatfield, N., *Magic and the Magician: E. Nesbit and Her Children's Books*, 1958; Bell, A., *E. Nesbit*, 1960; MacKenzie, N., *The First Fabians*, 1977.
- 6) Green, P., *Kenneth Grahame: a Biography*, 1959; Prince, A., *Kenneth Grahame: an Innocent in the Wild Wood*, 1994; Chalmers, P. R., *Kenneth Grahame, Life: Letters and Unpublished Work*, 1933; Kuznets, L. R., *Kenneth Grahame*, 1987.
- 7) Asquith, C., *Portrait of Barrie*, 1954; Rose, J., *The Case of Peter Pan*, 1984.
- 8) Taylor, J., *Beatrix Potter: Artist, Storyteller and Countrywoman*, New edition. 1996; Lane, M., *The Tale of Beatrix Potter*, Rev. ed. 1985; Linder, L., *A History of the Writings of Beatrix Potter*, Rev. ed. 1987; Hobbs, A. S., *Beatrix Potter's Art*, 1989; Taylor, J. ed. *Letters to Children from Beatrix Potter*, 1992; Taylor, J., *So I Shall Tell You a Story: Encounter with Beatrix Potter*, 1993.
- 9) Farjeon, A., *Morning has Broken: a Biography of Eleanor Farjeon*, 1986; Blakelock, D., *Eleanor: Portrait of a Farjeon*, 1966.
- 10) Christopher Robin Milne, 1920-96, with Pooh Bear, London: National Portrait Gallery.
- 11) Milne, A. A., *It's Too Late Now*, 1939; Milne, C., *The Enchanted Places*, 1974; Thwaite, A., A. A. Milne: *His Life*, 1990.

- 12) Brogan, H., *The Life of Arthur Ransome*, 1984; Hart-Davis, R., ed. *The Autobiography of Arthur Ransome*, 1967; Avery, Gilian, 'Ransom, Arthur Mitchell' *O.D.N.B.*, v.46, 2004, p.47-49.
 - 13) Saintsbury, E., *The World of Alison Uttley*, 1980; Alderson, Brian, "Uttley, Alice Jane" *O.D.N.B.*, v.56, 2004, p.23-24.
 - 14) Avery, Gillian, "Lofting, Hugh John" *O.D.N.B.*, v.34, 2004, p.299; Blisshen, E., "Hugh Lofting" *Wilson Bulletin*, Dec. 6, 1967.
 - 15) Carpenter, H., J. R. R. *Tolkien*, 1977; Shippey, T. A., *The Road to Middle Earth*, 1982; White, Michael, *Tolkien : a Biography*, 2001.
 - 16) Wilson, A. N., C. S. *Lewis*, 1990; Green, R. L. and Hooper, W., C. S. *Lewis : a Biography*, 1974.
 - 17) *New York Times*, Dec. 9, 1934.
 - 18) Alton, Anne Hiebert, "Goff, Helen Lyndon" *O.D.N.B.*, v.23, 2004, p.632-634; Bergsten, S., *Mary Poppins and Myth*, 1978; Moore, Anne Carroll, "Mary Poppins" *Horn Book*, v.11, 1935, p.6-7.
 - 19) Larkum, Eleri, "Norton, Mary" *O.D.N.B.*, v.41, 2004, p.181; *The Independent*, 4 Sept, 1992; *British Children's Writers, 1914-1960*, 1996.
 - 20) Woodward, Sir Llewellyn, *The Age of Reform 1815-1870*, 2nd ed. Oxford : Clarendon Press, 1962, p.681.
 - 21) 藤野寛之『児童書批評誌『ホーン・ブック』の研究：歴代編集長と協力者1924-2000年』金沢文圃閣, 2013, 158-159ページ。
 - 22) 藤野寛之「19世紀イギリスの教育改革の背景」『発達社会学研究』, 3号, 放送大学大学院, 2011, 26-28ページ。
 - 23) Porter, G. R., *The Progress of the Nation in Its Various Social and Economic Relations from the Beginning of the Nineteenth Century*, New ed., London : Methuen, 1912, p.147.
 - 24) Altick, Richard D., *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*, 2nd ed., Columbus : Ohio State University Press, 1998, p.388.
 - 25) 藤野寛之『児童書批評誌『ホーン・ブック』の研究：歴代編集長と協力者1924-2000年』金沢文圃閣, 2013, 162-163ページ。
- その他, 本稿執筆のために次の文献を参考にした。
- Adamson, John William, *English Education 1798-1902*, Cambridge : Cambridge University Press, 1930 (reprint 1964), 519p.; Archer, R. L., *Secondary Education in the Nineteenth Century*. Cambridge, Cambridge University Press, 1921 (reprint 1928), 363p. ; Ensor, Sir Robert. *England 1870-1914*. Oxford, Clarendon Press, 1936 (reprint 1988), 634p. ; Jeffares, A. N., *W. B. Yeats : a New Biography*, 1988; Wilson, A. N., *The Victorians*, 2002; Wilson, A. N., *After the Victorians*, 2005 ; ハント, ピーター著, さくまゆみこ他訳『子どもの本の歴史』柏書房, 2001 ; 定松正, 本多英明『英米児童文学辞典』研究社, 2001.

(2013年11月29日掲載決定)